

受講生の学習意欲を高めるための教育・学習情報通信の送付とその活用についての研究

鳴門教育大学学校教育学部教授 佐々木 保 行

1. 研究の目的

平成4年度の四国地区国立大学放送公開講座は、鳴門教育大学が担当し、テレビ科目は、「子どもの発達と教育」を放映した。番組の制作・放送は四国放送が担当した。なお四国地区の7つの国立大学は、昭和61年度から輪番制をとりながら他大学の協力を得て放送公開講座を実施している。

本研究は、受講生と放送による大学公開講座の実施側との有機的結びつきをはかるための一環としての位置付けを明らかにするものであり、受講生の学習への意欲を向上させる方途を提供することが主たる目的である。これまで四国地区では平成2年度の担当大学であった徳島大学が行った画期的試みの「放送利用学習における学習補助情報の効果に関する研究」という成果が公刊されている（参照：平成2年度放送利用の大学公開講座テーマ研究報告書、203-229、放送教育開発センター、1991年）。

今回の研究は、徳島大学の開発的研究に学び、その発展的継承として情報の送り手と受け手との関係をより深化させるため、放送開始前に第1回目の教育・学習情報に関する通信を郵送によって事前に送付した。また、放送期間中に3回、放送終了後に1回、合計5回の教育・学習情報を送付した。これらの観点から本研究は、放送番組、テキスト、スクーリングによる学習を補強し、学習者の学習意欲を高め、如何にして学習の動機づけをはかるかの方策について考察するものである。

2. 研究の内容と方法

受講生の教育・学習情報の通信は、出演講師の研究テーマや人間的プロフィールをはじめ講師から受講生へのメッセージ、関連参考図書の紹介、受講生の出演講師への質問及び回答、受講生の意見、国内外の教育・学習関連情報等から構成される内容のパンフレットを郵送により、定期的に受講生へ配付した。

研究の手法は質問紙法を用いるが、質問内容を構成する柱として以下の3点に重点を置いた。

- (1) 実施側からの教育・学習情報通信の送付は、受講生の学習意欲を高める上でどのように役立ったか。また、問題点は何か。
- (2) 教育・学習情報の送付内容の構成は受講生を満足させたか。また、問題点は何か。
- (3) 教育・学習情報の今後の通信方法は、どのような手段が望ましいか。

3. 効果測定の実施日

鳴門教育大学放送公開講座「テレビ講座通信うずしお」の送付終了後の平成5年1月31日（鳴門教育大学、香川大学、愛媛大学）及び2月7日（徳島大学、高知大学）に実施されたス

クーリングの際に、「受講生アンケート調査（各大学共通分）」に追加して、6項目からなる質問紙調査を実施した。さらにスクーリングに欠席した受講生に対しては2月8日から2月20日までに同内容の調査を郵送法により行った。なお、受講生総数1,221名のうち、アンケート回収数は505名で41.4%の回収率であった。

4. 調査結果の分析と考察

(1) 講座通信の受容状況について

テレビ講座の開講前に1回、開講中に3回、講座終了後に1回、計5回のA4判4ページ（1回分）からなる講座通信を四国地区の全受講生へ送付した。したがって、5回分のページ数は20ページの分量になる。この講座通信を「毎回とも読んだ」受講生は全体の68.9%（348人）、「2～3回ぐらい読んだ」受講生は24.6%（124人）、両者を合わせると93.5%（472人）もの高い割合で講座通信が読まれたことになる。さらに「1回だけ読んだ」受講生の2.8%（14人）を加えると96.3%（486人）は何らかの形で講座通信と触れ合ったことになる。たとえ1回限りの触れ合いでも映像やテキスト以外の学習情報が送られ、それと接触することは、受講生へ講座の持つ多様性を認識させることになると思われる（図1参照）。

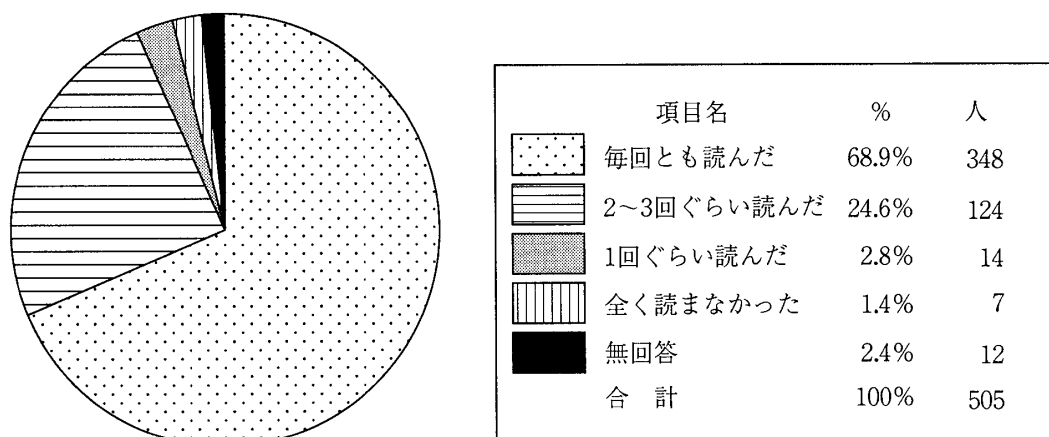


図1 「テレビ講座通信うずしお」の受容状況

図2は前問で回答項目の1、2、3、のいずれかを選択した受講生のみを対象に「講座通信の内容に対する興味・関心」について調べたものであるが、第1位は「テレビ出演講師のプロフィール」であった（486人中300人の61.7%）。第2位は「巻頭論文」の51.2%（249人）、第3位は「エッセーなど小論文」と「主任講師や番組制作者等のことば」がそれぞれ47.1%（229人）を占めた。また、受講生からのお便りや意見などの「声のひろば」も45.3%（220人）と多く、テレビ講座通信の目的の1つである送り手と受け手との双方向性コミュニケーションを行うことがある程度達成されたと言える。

(2) 講座通信の受講上の意義

図3は、講座通信がテレビ講座の受講上、役立ったか否かを調べた結果である。「大変役立った」と回答した受講生は33.3%（168人）、「少しは役立った」受講者は53.7%（271人）、

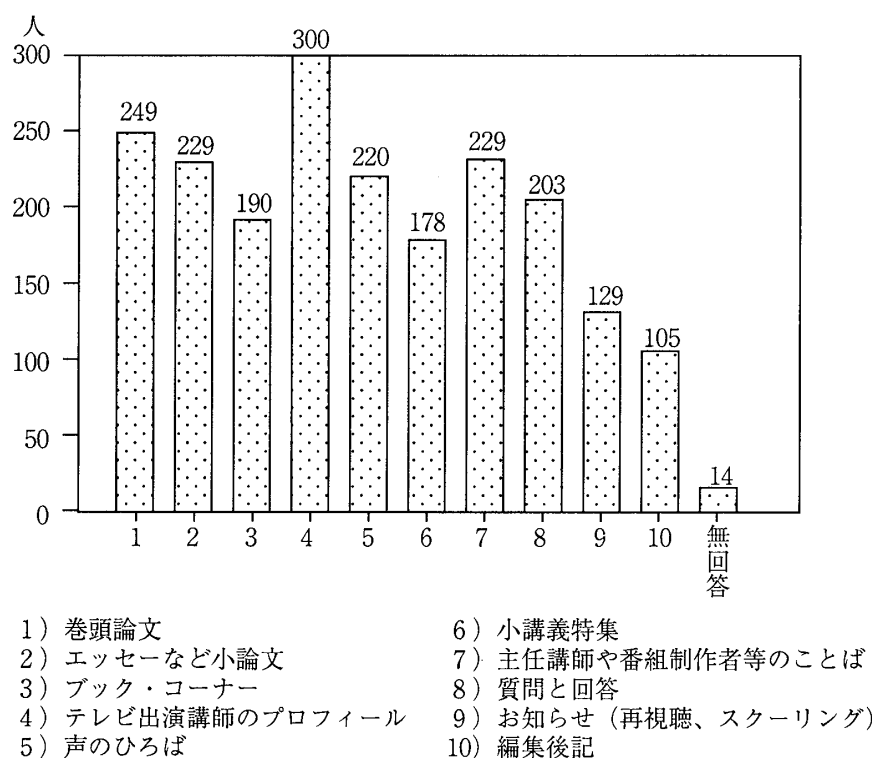


図2 講座通信の内容に対する興味・関心

両者を合計すると87.0%（439人）の受講者が肯定的な評価をし、講座通信の意義を強調した。このことは、放送内容やテキストの理解や学習をしていく上で、有効に機能したことについての評価と考えられる。

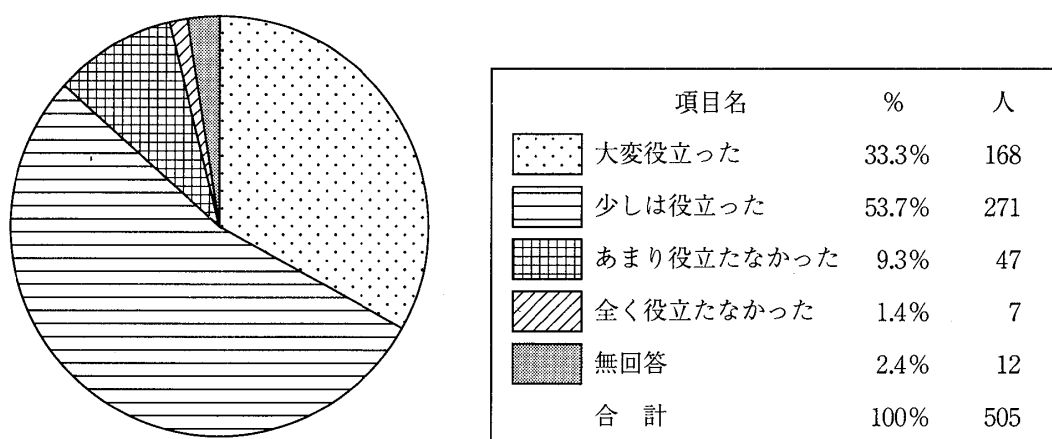


図3 講座通信の寄与

では、具体的にどのような点で講座通信は役立ったのであろうか（図4参照）。

前問で「大変役立った」と「少しは役立った」のそれぞれの項目に回答した受講生を対象に調べた結果、第1位は「講座内容に関連する情報や知識が得られた」が67.4%（439人中296人）、第2位は「出演講師へ親しみが持てた」が51.5%（226人）、第3位は「講座への親しみが増した」が47.8%（210人）、第4位は「子どもへの理解や反省など、自分自身のとらえ直し

に役立った」が44.2%（194人）の順であった。

このような結果から判明することは、講座通信の学習・教育情報によって受講生へ多くの情報や知識が新たに付け加えられたことを意味する。このことが、テレビ講座への対応を変化させることにもなり、講座通信が受講生の意識の形成に影響を与えたことを意味する。1回僅か4ページの情報も、送付されるか否かによって学習への取り組みが変容するのであるから、情報の持つ価値に対して改めて見直す必要があると言えよう。

さて、講座通信に対し、「あまり役立たなかった」と評価した受講生は9.3%（47人）、「全く役立たなかった」と評価した受講生は1.4%（7人）、両者を合わせると否定的評価の受講生は10.7%（54人）であった。全回答者の1割が否定的見解を示したのであるが、たとえ少数とはいえ受講生の心を動かすことが出来なかったことを反省している。では、これらの受講生はどのような通信内容に否定的な反応を示したのであろうか。

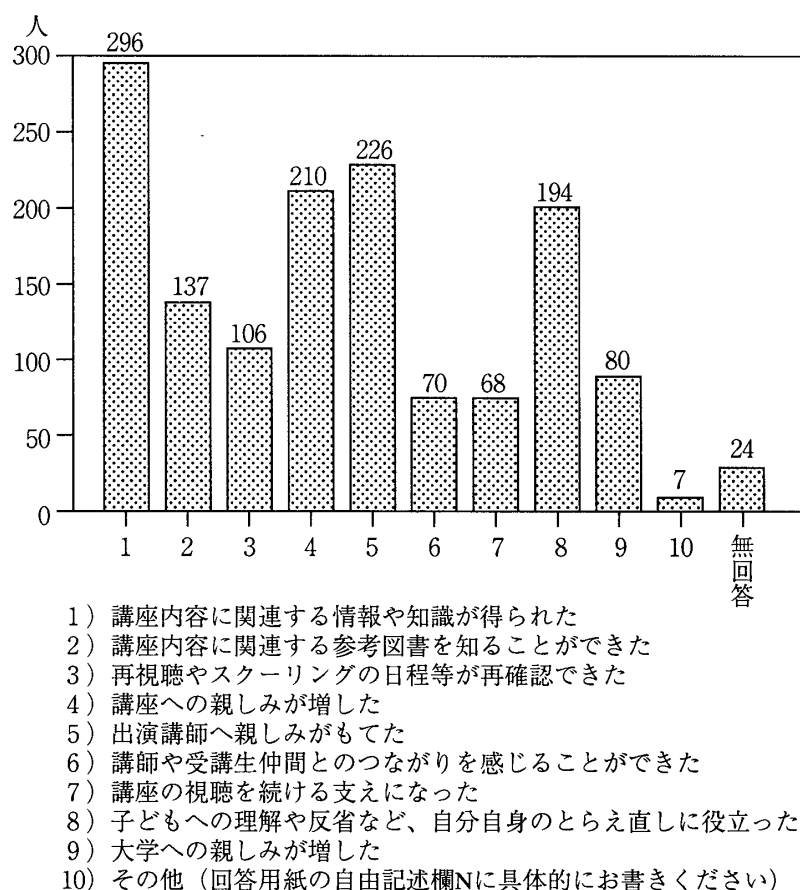
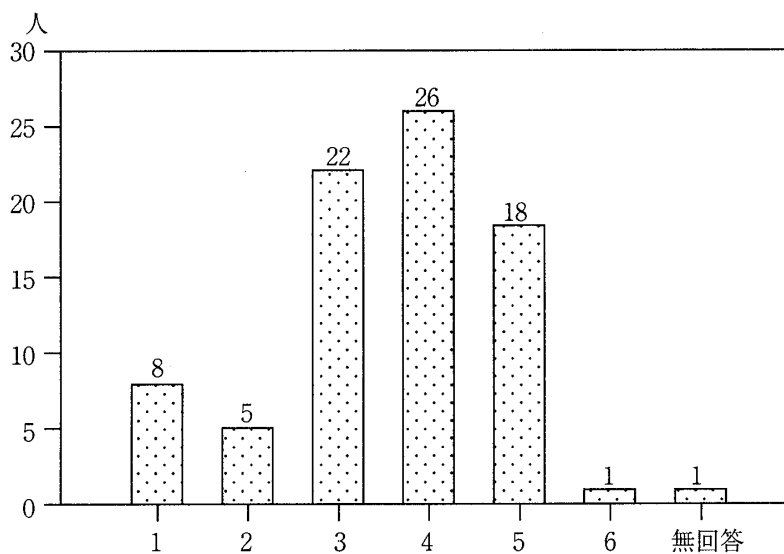


図4 体的に役立った点

図5によると改善点の第1位は、「講座内容に関連する参考図書をもっとたくさん紹介して、詳しい解説をつける」（54人中26人）であった。第2位は「受講生の質疑応答を中心に編集する」（54人中22人）、第3位は「講座通信の執筆者をできるだけ幅広い分野から選択する」（54人中18人）であった。

改善策への提言はいずれも積極的、好意的なものであり、講座通信のページ数の制約もある

が改善可能な側面も存在していることを考えると、送付側の配慮の問題点の追求の浅さを実感した。



- 1) ページ数をもっと増やして内容の充実につとめる
- 2) 講座通信の回数をもっと増やして内容の充実につとめる
- 3) 受講生の質疑応答を中心に編集する
- 4) 講座内容に関連する参考図書をもっとたくさん紹介して、くわしい解説をつける
- 5) 講座通信の執筆者をできるだけ幅広い分野から選択する
- 6) その他（回答用紙の自由記述欄Oに具体的にお書きください）

図5 講座通信の改善点

(3) 機関紙の必要性

「テレビ講座通信」のような機関紙が受講の際に必要なかどうかについて質問した結果（図6参照）、「必要である」と回答した受講生は、65.0%（328人）、「ないよりはあった方がよい」は31.3%（158人）、両者を合計すると96.3%（486人）の圧倒的多数の受講生がその必要性を支持した。一方、「必要ない」と回答した受講生は0.8%（4人）にすぎなかった。これらのことから「テレビ講座通信」は、テキストと放送番組、それにスクーリングというパターンの他に、双方向性コミュニケーションを高める上で必要なコミュニケーションであることが明確に確認されたといえる。

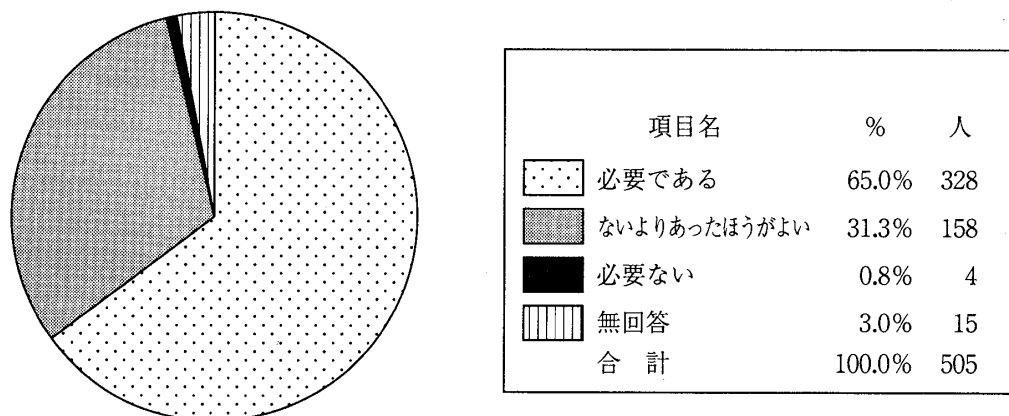


図6 講座通信の必要性

5. 結 論

本研究は、受講生の学習意欲を向上させ、講座への主体的取り組みを育成するために必要な教育・学習情報を定期的に送付することにより、受講生と大学側との双方向性コミュニケーションを密接にすることを目的として企画されたものである。平成2年度に徳島大学が放送公開講座を担当した折に試みたユニークな方法を継承的に発展させ、今回は、四国地区の全受講生を対象に計5回の「テレビ講座通信」を送付した。

その結果、約94%の受講生が講座通信を読み、なかでも出演講師のプロフィールの紹介文に接したことが、講師はもちろんのこと講座そのものへの親近感を持って受講することができたと評価された。なによりも講座は担当する側の情報によって影響される側面が大きく、この点では企画目的の一端にかなうものであった。さらに、放送やテキストでふれていない様々の情報が送付されることにより、受講生が主体的に放送やテキストと交流する構えが芽ばえ、講座そのものの持つ意義が発展的に拡大し深化したことを多くの受講生の回答から読みとれた。

事実、9割弱の受講生が講座通信が学習の上で役立ったことを指摘した。そのため講座通信のような機関紙の必要性が、97%もの受講生から必要なコミュニケーションであるとして圧倒的な支持を得た。

本研究は既に述べたように受講生の学習意欲の向上に関わるコミュニケーションのあり方を考察したものであるが、放送公開講座実施の多様性を検討する上でもまた講座の独自性を打ち出すためにも一般的にはあまり実施されていない方法を模索した。結果は予想以上の高い支持と評価が得られたことから、今後このようなスタイルのコミュニケーションがより推進されることが必要であることを痛感した。

以下に「講座通信」の1号から5号まで全てを紹介する。

テレビ講座通信うずしお

第1号

四国地区
国立大学放送公開講座

—子どもの発達と教育—

1992年
9月21日発行

発行：鳴門教育大学教務課 〒772 鳴門市鳴門町高島 TEL 0886-87-1311 (内線257)

子どものいまとこれから(1)



鳴門教育大学長
野地 潤家

四国地区国立大学（愛媛大学・香川大学・香川医科大学・高知大学・高知医科大学・徳島大学・鳴門教育大学）では、昭和61年度から、大学共同利用機関である「放送教育開発センター」と共催して、テレビを利用した放送公開講座を年度ごとに担当大学をきめて開講してまいりました。本年度（平成4年度）は、鳴門教育大学が担当し、テレビ講座では、「子どもの発達と教育」というテーマの下に実施することになりました。

子どもの発達と教育の問題が放送公開講座テレビ科目に取り上げられるのは全国的にみまして今回が初めての試みであります。受講していただきます皆様に、心から敬意を表しますとともに、皆様のご期待に十分おこたえすることができますように、関係者一同努力する所存でございます。

ことし、8月初め、「朝日新聞」は、ワシントンからの共同通信として、「内戦が続くソマリア（引用者注、アフリカ）の視察から戻った米対外援助局のカンダー災害対策局長は三日記者会見し、ソマリアの飢餓は深刻化しており、このまま放置すれば半年以内に乳幼児の四分の三が餓死する恐れがあると指摘、食糧配給の救援要員を守るため国連武装治安部隊を展開するという国連の計画を強く支持すると述べた。」と報じました。また、「カンダー局長によると、ソマリアでは百五十万人が飢えの危機に直面、乳幼児の二五％が既に死亡するなど一九八四～八五年のエチオピア大干ばつに匹敵する状態ともいう。」と報じました。しかも、治安状態が悪く、武装したギャングが市内をうろついて銃撃による犠牲者を出して

おり、国際救援組織は最大限の努力をしているのに、こうした無秩序のため、モガディシオ港の倉庫には七百トン以上の救援食糧があふれんばかりに貯蔵されている一方、わずか一キロ先では市民が飢えに苦しんでいるのが実情であると報じました。

こうした記事（報道）に接しますと、暗澹とした気持ちにさせられ、具体的に援助の手をさしおけることができない非力感を覚えずにはられません。

子どもの置かれている地球規模の環境について、具体的に適切な対応策が講じられることを願うとともに、足もとの問題として、わが国の子どもたち、あるいはわが子のことに考えを及ぼさずにはられません。

考えてみれば、社会人としての自己をとらえることは、容易なことではありません。子どもの発達と教育のことを十分にとらえていくことは、これまた容易なことではありません。容易なことではありませんが、子どもの発達と教育について、多角的にかつ体系的に調査・研究・実践の結果ないし成果を確かめ、数多くの検証、検討、考察を経て、新たな知見を、あるいは示唆を得たいと願ってやみません。

新しい世紀に向かって伸び、その活躍が期待されている子どもたちの未来像をどうとらえていくのか——考えてまいりますと、各界各方面の協力を得ながら、たえず問題意識を新たにして、ねばり強く取り組んでいかなければならないことに、改めて気づかされます。本講座によって、子どもの発達と教育について、新たな発見がもたらされることを願ってやみません。

「テレビ講座」主任講師のことば

— 超低出生率は何を警告するか —

鳴門教育大学教授

佐々木 保行

厚生省人口動態統計による 1991 年の出生率は、ついに史上最低の 1.53 人になりました。この出生率は正式には合計特殊出生率といい、妊娠可能な年齢（15 歳から 49 歳まで）の女性を対象に、各年齢ごとに子どもの出生数を女子人口で割った出生率の算出を行って合計します。したがって 1 人の女性が一生の間に産む平均子ども数を表すものですから、出生率の急激な低下は、まさにショックとして受けとられることになります。事実、1989 年の出生率は 1.57 人という発表が行われた 1990 年には、「1.57 ショック」という言葉が日本中を駆けまわりました。マスコミによる報道もさることながら、出生率がなぜ下がり続けるのかという問題に、多くの国民は関心を寄せざるを得なくなりました。

世界先進諸国の現在の死亡率の状況の下では、出生率が 2.09 を下まれば人口は将来、減少するポテンシャルを内蔵していることになり、また 2.09 ならば人口は増えも減りもしないという静止人口の状態になります。したがって 2.1 人の子どもを 1 人の女子が一生の間に産むと、世

代の単純再生産が可能となって一国の人口の維持ができることになります（学士会会報、No794 1992 年）

ではわが国の超低出生率がこれからも続くとうなるでしょうか。人口は減少し、人口の高齢化が急速に進行します。政府をはじめさまざまな関係機関が政策的対応や提言の具体化へ取り組んでいます。これまで先進諸国の出生率の低下は共通の現象とみられていました。しかし 1980 年代に入ってから多くの先進諸国では、出生率が上昇しはじめたのです。とりわけスウェーデンは 1983 年に合計特殊出生率が 1.61 人まで下がったあと、1989 年には 2.02 人まで上昇しました。その原因の第 1 は「生めよ殖やせよ」といった精神論を排除し、「産みたい人が、安心して産める」ための環境づくりを徹底的に緻密に整えたからだといわれています（朝日新聞、1990 年 8 月 20 日付社説）。

超低出生率の背景分析にはさまざまな考察が展開されていますが、子どもを安心して産めない理由の各種調査結果の第 1 位が示すように、出産・育児の負担があまりにも女性の側にかかりすぎていることです。性別役割分業思想の強いわが国でいま求められているのは、男性の生き方や意識を見直し、変えていくことではないでしょうか。

制作責任者のことば

四国放送株式会社
第一制作部長

胡田 俊一



かつて学生時代、講義をさぼり、代返の常習者だった私が今回大学公開講座の制作責任者になろうとは……。

ことしのテーマは「子どもの発達と教育」なじみやすいテーマですが、やはり大学の公開講座だけにむずかしい言葉が沢山出てまいります。四国放送が大学公開講座の制作を担当して今回で 2 回目になります。少しはノーハウを身に付けたつ

もりですが、やはり苦労しています。受講対象者は高校卒業以上ということで、できるだけ内容を噛み砕くよう心掛けています。やさしい言葉に置き替えようとするあまりに講師側と議論することも再々あります。つまり、できあがった作品は講師側と制作者側の攻め合いの結果と言えます。

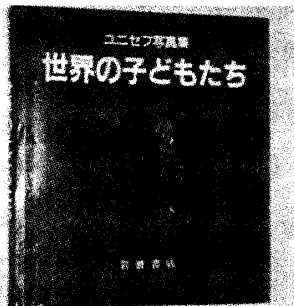
1 回の講義は 45 分。起き抜けの寝ぼけた頭脳に単調な講義は禁物です。45 分の間にできるだけ変化をもたせ、興味を起こさせるため、必ず VTR を挿入するようにしております。

今回の制作に当たっては、前回の担当プロデューサーで番組を熟知している橋本潤一郎氏が構成者を務めていますので、私としても大船に乗った気持ちです。

鳴門教育大学の公開講座は 10 月 3 日（土）から始まります。代返は効きませんよ。いつもより早起きをして講座に挑戦して下さい。

←ブック・コーナー→

テレビ講座をよりよく理解し、深めるための参考図書を、これから3回にわたって紹介いたします。



ユニセフ写真集 世界の子どもたち

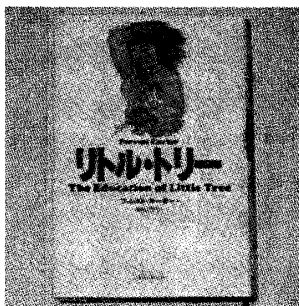
岩波書店

1992年2月刊

4800円(本体4660円)

本書は、1989年の第44回国連総会において満場一致で採択された「子どもの権利条約」を記念し、ユニセフ(国連児童基金)が企画して刊行した国際共同出版の写真集です。ここには路上で遊ぶ子ども、伝統行事の中の子ども、難民収容所の子ども、身寄りのない子ども、飢餓にみまわれた子ども、戦争におびえる子どもなど、さまざまな子どもの姿が写し出されています。

しかし、絶望と極貧の地の子どもでも、彼らの顔にはやすらぎと静寂が、そして躍動と希望があふれています。この子どもたちを前にして、いま大人は何をしなければならないのでしょうか。写真というメディアのもつ重さがひしひしと伝わってきます。



フォレスト・カーター 著(和田穹男訳)

リトル・トリー

ぬるくまー発行所

1991年11月刊

1854円(税込)

アメリカの東チェロキー山中における祖父母との生活をつづった作者の自伝的な回想録の本書は、現代人が見失った“大切なもの”が何である

かを、インディアン少年リトル・トリーのはてしなきロマンの世界への誘いによって体得できる愛と感動と涙の物語です。

本書の原題 The Education of Little Tree が示すように、幼いリトル・トリーを育てあげた第一の教師は武骨でしかも無教養な祖父でした。この他に祖母やインディアンの人々もあげられますが、飼いいヌ、森の中の鳥、虫、草、木、そして雲や風などの自然も、魅力的な教師として描かれています。こうした豊かなふれあいの中で培われた少年の内面の世界から、物質文明へ鋭い批判の矢が射られていることに読者は気付くに違いありません。



ベティ・マイルズ著 (金原瑞人 訳)

活動マニュアル

地球を救おう

ほるぶ出版

1992年5月刊

1500円(本体1456円)

去る6月リオデジャネイロで地球サミット(環境と開発に関する国連会議)が開催されました。これは宇宙船地球号の未来をかけた前例のない大規模な世界会議でした。いまや地球環境問題は全人類共通の課題です。

本書は1974年に刊行され、20年間にわたってアメリカで読みつがれてきた本の1991年版です。しかも大地、大気、水、エネルギー等、地球をおびやかしている問題に活動している子どもたちのレポートなのです。

「地球全体のことを考え、身近なところで活動しよう。そうすれば、地球を救うことができる。今すぐに、はじめよう。」

声のひろば

テレビ講座通信「うずしお」は四国地区のテレビ講座受講生全員に配布されます。番組やテキストの内容などに関する質問、講座に対するご感想やご意見など、どのようなものでも結構ですので次のあて先までお送りください(なお匿名をご希

望の場合はその旨、明記してください)。

今後の通信の発行を予めお知らせします。

第2号(10月12日頃)、第3号(11月9日頃)、
第4号(12月7日頃)、第5号(1月8日頃)

〒772 鳴門市鳴門町高島

鳴門教育大学教務課研究協力係「テレビ講座」担当

テレビ出演講師のプロフィール



鳴門教育大学教授
テレビ講座主任講師
佐々木保行(ささきやすゆき)
(第1回・第2回出演)

千葉県九十九里浜沿いの横芝町生まれ。養育行動の心理学的研究を中心に、乳幼児の発達と父親の役割を研究。一昨年、昨年と続いて子どもの誘拐防止のアニメ・ビデオを開発・制作。かつて「徹子の部屋」でトットちゃんと子育て談義。推理作家の夏樹静子氏ともTVでトーク。運転免許をアメリカで取得したせいか、いまだに自動車の構造音痴。本当は人間よりも土いじりなど自然との対話を好む。酔うと創作ハンカチ踊りがとび出す。



鳴門教育大学教授
湯川聰子(ゆかわとしこ)
(第3回出演)

京都市生まれ。住宅を取りまく居住地をどのように住みやすくしたらよいか、という地域居住論が専門。とりわけ子ども、障害者、高齢者が住みやすい地域のあり方を研究する気鋭の建築学者。最近、スウェーデン、デンマーク、アメリカの各国にまで足をのばして高齢者の住宅政策を視察してきた。学生時代はピアノに熱中したが、いまはコーラス仲間とうたうことが好き。低音の美声と知性とは落ち着いた雰囲気をかもし出す。



鳴門教育大学助教授
山下一夫(やましたかずお)
(第2回出演)

大阪市城東区の生まれ。有能な若手臨床心理学者。大学では豊富なカウンセリングの経験をもとに、学校現場で派生する諸問題、とりわけ人間関係の風通しをよくするための研究に没頭。日常生活でのストレスは学生とチームを組むタッチ・フットボールで解消。夢は横浜スタジアムで行われる全国大会へ出場すること。おだやかな人柄は同僚からも敬愛的。一方、会議で言うべき事を臆せず発言する正義派。



鳴門教育大学教授
杉原潤之輔(すぎはら
じゅんのすけ)
(第4回出演)

徳島市生まれ。専門は水泳と野外活動の研究。現在は野外活動に重点を移しているが、数年前、四国遍路の体育学的研究というユニークな研究をまとめた。特技は限りなく本物に近い手打戸隠しソバの製造。学生時代の雪上キャンプの経験から信州と深く関わって30年。インスブルック大学で在外研究の折、水泳を教える代わりにスキークの教授を受ける。現在、全日本スキー連盟指導員の資格をもつ。



鳴門教育大学教授
田中雄三(たなかゆうぞう)
(第3回出演)

鳥取市生まれ。精神科医。専門は青年期に好発する精神分裂病、そううつ病、神経症などの精神病理学的研究。医学部から教育大学へ移って日も浅く、まだ役割アイデンティティの危機があるという。でも人間を教育することにかわりがないので、誠意をつくして頑張るとたのもしく宣言。ゆったりとした言葉のはしほしに信念の強さを垣間見る。囲碁2段の腕前。



鳴門教育大学教授
山本貞美(やまもとさだみ)
(第4回出演)

熊本県下益城郡生まれ。体育科教育を専攻。とくに授業力の向上をめざした教師の授業観察力を研究。年平均2回位、体育の授業研究の講演で全国各地から声がかかる。小学校17年、高校5年、女子大5年の教職経験を有する。体育実技の専門は陸上競技、なかでも400mハードル。マスターズの四国大会の走り高とび部門で3年連続優勝を飾る。四国88ヶ所を徒歩で1年間で踏破した努力と根性の持主。

編集後記

テレビ講座通信「うずしお」の第1号をお届けします。この機関紙はテレビ番組とテキストで学習する受講生を対象に、少しでも学習の手助けになる情報をお伝えするものです。

そのため機関紙の内容の一つ一つが、大学からのメッセージとして受けとっていただければ幸いです。一方、受講を通して学友となったみなさんからのメッセージも大歓迎です。「うずしお」は、テレビ講座に関係するみんながともにつくるふれあいの広場なのです。
(Y.S.)

テレビ講座通信うずしお

第2号

四国地区
国立大学放送公開講座

—子どもの発達と教育—

1992年
10月12日発行

発行：鳴門教育大学教務課 〒772 鳴門市鳴門町高島 TEL 0886-87-1311 (内線257)



鳴門教育大学長
野地 潤家

子どものいまとこれから (2)

放送公開講座テレビ科目「子どもの発達と教育」を受講していただきますこと、深く感謝申し上げます。また、多くの回数を重ねたわけではありませんが、1回1回の放送から、お役に立つことが見いだされ、あるいは、新しい発見がなされればと、願っております。

自らの子ども時代に思いをいたしますとき、だれしも感慨の深いものがあろうと思います。当然、記憶にさだかに刻まれているものと、忘れ去って思い出に残るほどのものは1つとしてないという場合と、さまざまであろうと思われませんが、思いを潜めれば、自立するに至るまでの道程では、試行錯誤をくり返ししながら、坦々たる道ではなかったことに気づかされます。

自立と自律とは、成人として生きていくうえで、たえず自らに言いかけなければならない問題であります。しかも、自律、自ら律していくことは、至ってむずかしく、自らの主体性・自主性の確保が容易ではないことに思ったりします。

子どもの置かれている現実態を正確に把握していくこと、同時に、子どもたち1人ひとりの可能性を、どう見まもり、どう伸ばしていくか。とりわけ、可能態・可能性の発見を、子どもに接する人たちの手によって確かなものにしていきたいと願わずにはいられません。

本年度の学校基本調査(文部省、8月10日発表)によりますと、平成3年度に「学校嫌い」を理由に年間50日以上欠席した子どもたちは、小、中

学生合わせて5万3千3百56人で過去最多となり、前年度に比べ、小、中学生とも大幅に増えていきます。今回は、早期発見の狙いから、初めて年間30日以上欠席者の調査も行われ、その結果、1万2千人を超えた小学生を含め、約6万7千人に上る小、中学生が、年間30日以上休んでいることがわかりました。中学生は100人に1人の割合になります。小学生への広がりや併せますと、不登校問題の深刻さが改めて浮き彫りにされました。

中国地方のある県では、県下の小学校で不登校児童が増え続け、本年度の学校基本調査で過去最多となりました。受験戦争の低年齢化や核家族化が不登校児童の増加の背景と見られ、依然多い中学生の不登校と併せ、低年齢化が深刻な問題になりつつあると、地元の新聞では報道されています(本年8月14日付)。それによりますと、県教委としても、積極的にかつ周到に対策を講じ、あるいは講じようと真剣に検討が進められていると述べられています。

家庭において、学校において、地域社会において、さらには国において、子どもたちの未来像をどのように描いていくのか。また、子どもの教育(学習・指導)をどのようにしていくのか。子どもたちの自立と自律をどのようにして確かなものにし、揺るぎのないものにしていくのか。改めて、学校、家庭、地域社会、国の負うべき課題の重さを覚えずにはいられません。1人ひとりの子どもの自立と自律への道程を豊かなものにしていきたい—そのむずかしさは覚悟のうえで、全力傾注をしていきたいと念じて取り組んでまいりたいと思います。

子どもとテクノロジー

鳴門教育大学副学長
河野 和豊

子どもとおもちゃとの出会いを思い出してみましょう。おもちゃを見る、さわる、動かす、使う、こわす、修理する、改良する等々と五感による体験、子どもの感性や手を通して技術（わざ）をみがいて行く様子を育児の中でご経験のことと思います。手は第2の頭脳とかいわれています。ホモ・ファバー（「工作する人」の意）という言葉がありますが、これは、動物と人間とを区別する本質は物を作ること、特に道具を作ることにあり、人を指す語に用いる（広辞苑）とあります。子どもが手を使って遊び、物を作ったりしながら、創造力や感性を養い、自然とか環境との調和を体感して行きます。

よく耳にすることですが、生物とくに虫などと子どもとの出会いにおいて、母親が虫を好きであるかどうかにより、子どもの虫の好ききらいが決まるとかいらわれています。テクノロジー（技術）についても同様なことがいえます。たとえば、父親がおもちゃと一緒に遊んでやるとか、こわれた時に修理してやるとか、模型飛行機と一緒に作るとか、アマチュア無線で交信する等々、子どもと共に物を創ることが大切です。一方、母親は、子どもがおもちゃをこわしたり、機械などをこわした時に寛容な態度でいてほしい、しからないでいてほしいと思います。機械いじりの好きな子は、とにかく何でも分解して中のようすを知りたがります。組立ては出来ないばあいが多いいのです。何故なら、ねじの部分もありますが、接着の部分も多いからです。

子どものテクノロジーの心を芽生えさせ、育て、立派に成長させるのは、このように家庭の環境にはじまり、友だちとの交流、そして、学校、社会の教育環境であります。わが国の科学技術の進展は、子どもたちのテクノロジーの萌芽のたまざる育成にあります。

子どもと食事

鳴門教育大学教授
岡田美津子

健全な心身の発達には各時期の生理特性に応じた栄養が大切です。特に幼児期は離乳完了後の成人食への第一歩であり、基本的な生活習慣が確立される時期でもありますので、よい食習慣を育てるようにしたいものです。

まず、食事時間をきちっと決めることによって規則正しい食事をさせるように心がけましょう。しかし、まだ3度の食事のみで栄養が充分とれるほど体は発達していませんので、間食で栄養補給をする必要があります。また、一般に子どもの嫌いな野菜、魚などは調理法を工夫することによって食べやすくし、できるだけ種類の多い食品をとらせることによって好き嫌いをなくしましょう。そして、味付けはできるだけ薄味にしましょう。

味覚は子どもの時期にはとても敏感ですので、かなりの薄味で充分です。甘味の強いものをつとる習慣をつけるとつい糖分を摂りすぎて肥満につながりますし、塩分を多く摂ると高血圧の原因になります。

最近、子どもの肥満が再び問題になっています。成長期にあるからといっても余り摂りすぎては食べすぎの習慣がついてしまいます。適度な運動など体を動かすことを考えて、子どもの身長と体重のバランスにも心を配りましょう。また、カルシウムは子どもに限らず日本人が最も不足しがちな栄養素です。しかも、子どもの骨折は肥満とならんで問題になっているところなんです。特に成長期にあっては骨量を増やすことが必要です。カルシウムの最もよい給源は牛乳と乳製品で、これらを積極的に摂らせるよう心がけたいものです。

最後に、保育所や幼稚園での食事や間食、また、学校給食にも充分関心をもって、子どもたちの食べているものに目を向けましょう。そして一家団らの食事を楽しみながら、子どもたち自身にも、食の知識と関心を持たせるような努力が望まれます。

ブック・コーナー

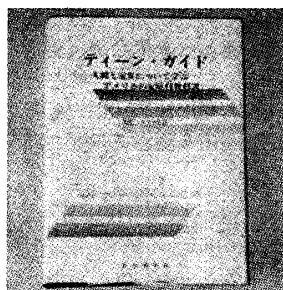


大日向雅美著
母性は女の勲章ですか?
産経新聞社

1992年4月刊
1500円 (本体1456円)

母性研究という末路の分野へ果敢に挑戦して20年になる著者が、昨今の母性論ブームの横行を鋭い筆致で反証します。女性の全的存在が子どもを産むことだという母性神話は、いまなお根強く社会にはびこって、とりわけほしくても産めない女性を幾重にも縛りつづけます。苦悩と偏見で、きりきり舞いさせられている女性たちの生の声を、直に聞きとる作業を通して迫る著者の母性論は、母性神話の虚構性を見事に暴き出しています。

しかも子どものいないことの苦悩をひきずる女性たちの背後に、女の生き方の極致が母性の全的開花という社会的、政策的な操作が行われてきたことを、伶俐な分析と考察で解き明かしています。同性としての共感とやさしさが流れている本書は、母性研究の第一人者にしてはじめてなせる文体から構成されています。



ヴァレリー・チェンバレン著 (牧野カツコ監訳)
ティーン・ガイド
— 人間と家族について学ぶアメリカの家庭教科書 —

家政教育社1992年5月刊
4326円 (本体4200円)

本書はアメリカの中学校段階での家庭科のテキスト (第6版) で、第1部人間関係、第2部家族、第3部住生活、第

4部資源、の各部を訳出したものです。第5部衣生活と第6部食生活は続編として翻訳の予定ですが、今回の訳出部分にアメリカの家庭科の特徴が反映されています。それは自己理解から他者理解へ、そして自己と家族というように、人間理解の基盤こそ家庭科教育の根源とする思想を端的に示しているからです。

人間が生活し、学習する上で最も基本的な教科の一つである家庭科は、今日の学校教育の中ではともすると軽んじられがちです。しかし暮らしに関わる家庭科の意義は、一層重視されねばなりません。本書を男女共学に取り組む家庭科の教師だけでなく、すべての教師や子どもを育てている両親にすすめたい本です。



山本直英・高柳美知子・
安達倭雅子編著
木原千春・画
性の絵本 (全5冊)

大月書店 1992年4月刊
セット6500円
(本体6310円)

「性にめざめた子どもたちが知りたい究極のテーマは、実はおとなたちが隠している『性交』と『外性器』なのだが、このふたつを子どもが堂々と学べる本、子どものニーズに応えたいという愛情でもって書かれている性教育の本」を作るために編集されたのが、全5冊からなる「性の絵本」です。

親や先生といっしょに明るくさわやかに性を語り、学びあうことのできる本は、いまの日本にはほとんど見あたりません。そのためポルノ雑誌やセックス産業が誤った性情報を流して汚染した人間の性を、人権として回復させることが必要です。豊かな人間関係を築くことのできる生き方とは何かを、性というテーマを通して追求する本書は、大人から子どもたちへ送られた人間愛に満ちたメッセージです。

再視聴のお知らせ

受講生のために、ビデオレコーダーを設置した再視聴会場を開設します。番組を見落とししたり、もう一度視聴したい方は御利用ください。再視聴は、次のとおり行います。なお、再視聴を希望される方は、再視聴日の前週水曜日までに希望する放送回を次の地元の大学まで電話でお申し込みください。

※ 大学では、テープのダビング (再録画) はいたしません。

実施会場	第1回～第4回放送分 平成4年11月8日 (日)
鳴門教育大学	① 13:00～13:45
徳島大学	② 13:50～14:35
香川大学	③ 14:40～15:25
愛媛大学	④ 15:30～16:15
高知大学	

鳴門教育大学教務部教務課研究協力係
☎0886-87-1311 (内線257)
徳島大学大学開放実践センター
☎0886-23-2311 (内線7101)
香川大学生涯学習教育研究センター
☎0878-33-1687

愛媛大学庶務部庶務課学事係
☎0899-24-7111 (内線2116)
高知大学庶務課学事調査係
☎0888-44-0111 (内線129)

テレビ出演講師のプロフィール



鳴門教育大学教授
山下 喬（やましたたかし）
（第5回出演）

東京都本所の生まれ。呼吸器、腫瘍、血液などの内科学が専門。とくにガン転移形成のメカニズムとその抑制を研究。本学保健管理センター所長を兼任。「患者のためのお医者さん鑑」（テレビ朝日刊）に紹介されたガンの専門医。テニス、音楽鑑賞をはじめ、日本や外国の古代歴史書、なかでも日本の歴史書を読むことが好き。眼鏡の奥のやさしい眼が、鳴門教育大教職員や学生の健康をいつも見守っている。



鳴門教育大学助教授
佐古秀一（さこひでかず）
（第6回出演）

大阪市阿倍野区の生まれ。専門は、教師の経営的な行動が子どもの集団行動や対人関係にどう影響を与えるか、についての研究。柔和な顔と筋の通った芯の強さで学生に人気抜群の若手有能研究者。熱烈な阪神ファン。子どものときから全国の鉄道、とりわけ地方の私鉄に乗るのが大好きという鉄道マニア。この関係で小学生時代から交際している友人もいる。着実な研究と定評のある指導は学内外に知れ渡る。類まれな大型研究者として囑望されている。



鳴門教育大学助教授
井上和臣（いのうえ かずおみ）
（第5回出演）

徳島県小松島市の生まれ。精神科医。うつ病や神経症など感情の病気の治療方法について研究。とくに精神療法の治療に関心をもち、1年間ペンシルバニア大学医学部へ研究留学した。がっちりした体格の持ち主だが、身体を動かすことは得手ではない。そのかわりクラシック音楽をこよなく愛すると同時に孤独の時間・空間の世界を好む。最近、オペラ観劇にこる。深い学識と温厚な性格から指導を希望する学生が目白押し。



鳴門教育大学教授
田辺健二（たなべけんじ）
（第7回出演）

大分県庄内町の生まれ。専門は有島武郎に関する研究と徳島県出身の社会運動家・文学者賀川豊彦の調査研究。映画鑑賞が殊の外好き。「徳島でみれない映画をみる会」の会員。最近、「コルチャック先生」をみて感動。自らスポーツをすることはないが、スポーツならなんでも興味をもって観戦。いつも折目正しい服装で身を包む。整然とした研究室を舞台にマイペースで地道に成果を積みあげていく。



鳴門教育大学助教授
吉崎静夫（よしざきしずお）
（第6回出演）

茨城県那珂湊市の生まれ。授業における教師と子どもの心理を研究。多数の著書、論文があり、6年前UCLAとミシガン州立大学へ在外研究員として留学。若手研究者仲間のリーダー的存在。大の巨人ファン。教職員のテニス部に所属し、研究とスポーツを巧みに両立させている。カラオケ十八番は「昔のアリス」。国際学術研究誌の編集委員もつとめる国際学派。引き抜き防止対策の必要なVIP級研究者。



鳴門教育大学教授
佐々木宏子（ささきひろこ）
（第7回出演）

京都府峰山町生まれ。児童心理学と児童文化の視点から絵本の研究および、幼児と映像文化との関わりを研究。児童図書のデータ・ベース作りの研究会を主宰。10年前に留学した深南部のジョージア大学へ在外研究員として近々、出発の予定。メリーランド大学、コロラド大学、その他から講演の招へいがすでに届く。海辺の散歩、月光浴が趣味。文学、評論、音楽、絵画、映画と幅広いジャンルに興味をもつ。カラオケとゴキブリが殊の外嫌い。

編集後記

開講前に少しでも役立つ情報と思い、先月お届けした第1号はいかがでしたでしょうか。限られた紙数の中での情報ですので、不十分な点が多々あると存じます。どうかご容赦

ください。

本号は前号に続き、鳴門教育大学野地潤家学長の巻頭論文を掲載いたしました。わが国の国語学界および国語教育学界の重鎮である野地学長の含蓄ある文章を味わってください。

(Y. S.)

テレビ講座通信うずしお

第3号

四国地区
国立大学放送公開講座

—子どもの発達と教育—

1992年
11月9日発行

発行：鳴門教育大学教務課 〒772 鳴門市鳴門町高島 TEL 0886-87-1311 (内線257)



鳴門教育大学副学長
田中 昭徳

親は子どもに何を学ばねばならないか

子どもの「宇宙」 子どもは「小型の大人ではない。」「子どもは子どもとして生きさせなければならない。」「子どもには、子どもの宇宙がある。」このことを強く主張したのは、近代教育史上「子どもの発見者」と呼ばれるジャン＝ジャック・ルソー* (Jean-Jacques Rousseau, 1712-1778) です。彼は「教育のバイブル」と称される、その著作『エミール、または教育について』(ÉMILE OU DE L'ÉDUCATION, 1762)のなかで、こう述べています。「人は子どもというものを知らない。子どもについて間違った観念をもっているので、議論を進めれば進めるほど迷路に入りこむ。このうえなく賢明な人々でさえ、大人(おとな)が知らなければならないことに熱中して、子どもには何が学べるかを考えない。彼らは子どものうちに大人をもとめ、大人になるまえに、子どもがどういうものであるかを考えない」と。

子どものなかには、ひとりひとり、広大な「宇宙」があります。それは無限の広がりと深さをもって存在しています。大人たちは、子どもの姿の小ささに惑わされて、ついその広大な宇宙の存在を忘れてしまうのです。大人たちは小さい子どもを早く大きくしようと焦るあまり、子どものなかにある広大な宇宙を歪曲してしまったり、回復困難なほどに破壊したりするのです。このような恐ろしいことは、しばしば大人たちの自称する「教育」や「指導」や「善意」という名のもとになさ

れているのです。——臨床心理学者で京都大学教育学部教授(現、国際日本文化研究センター教授)の河合隼雄氏は、その著『子どもの宇宙』(岩波新書、黄版386)のなかで、こう指摘しておられます。まさにその通りでしょう。

子どもに学ぶこと 子どもたちの澄んだ目は、この「宇宙」を見すえて、日々新たな発見をしています。大人になるということは、子どものときもっていた素晴らしい「宇宙」の存在を忘れることであってはなりません。実際、われわれ大人も自己自身のなかに宇宙を有っているのです。しかし、大人は目先の現実とにかく心を奪われるので、自分のなかの「宇宙」のことなど忘れてしまうのです。しかも、その「宇宙」の存在に気づくことには、あんがい恐怖や不安がつきまわったりもするのです。

大人はそのような恐怖や不安を避けるために、子どもの「宇宙」の存在を無視したり、それを破壊したりしてはならないのです。したがって、その逆に、子どもの「宇宙」の存在に、われわれ大人が知ろうと努力するときには、自分自身の宇宙について忘れていたことを思いだしたり、新しい世界を発見したりすることにもなるのです。子どもの「宇宙」への探索は、おのずと大人自身の「自己の世界」への探索につながってくるのです。「子育て」はまた同時に「親育ち」であることを、われわれは識らなければなりません。

*フランスの思想家。ジュネーヴに生まれる。1750年『学問芸術論』が懸賞に当選して以来多方面にわたる文筆活動を通じて人間性の回復を主張し続けた。『人間不平等起源論』(1754)、『社会契約論』(1762)が有名。また、『エミール』は近代教育の「聖書」と称されている。

受講登録者—1,221名!!

鳴門教育大学の企画・担当によるはじめてのテレビ放送公開講座「子どもの発達と教育」は、1221名という予想をはるかに上回る多数の受講生の参加をいただきました。関係者一同、改めて子どもの問題に対する社会の関心の高さを思い知らされました。本号の巻頭論文とも関連しますが、親や大人が自己の「内なる子ども像」を知ることが、子ども理解と同時に自己理解を深めることにつながるのです。したがっていま親や大人に必要なことは、この「内なる子ども像」の確認ではないかと思われます。

想でないことをこの数字が物語っています。

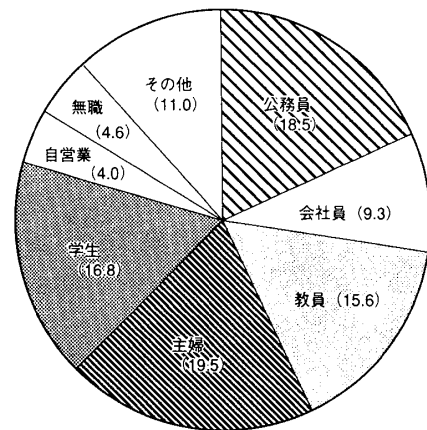


図2 受講生の職業別内訳 (%)

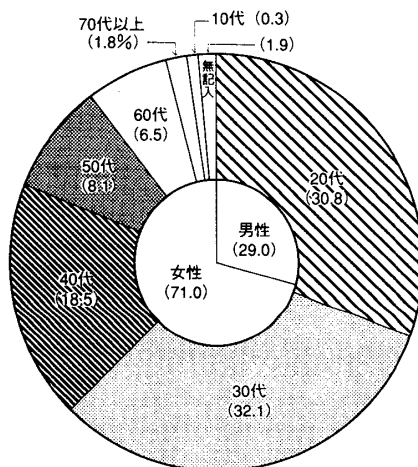


図1 受講生の性別・年代別内訳 (%)

さて、図1は受講生の性別と年代別からみた内訳を示したものです。まず性別では全体の71.0%を女性が占め、男性は29.0%です。この比率で見ると、受講生の大半は女性ですが、子どもの問題に3割の男性が関心をもって登録したという事実は、いままでと異なる小さな、しかし大きな変化を象徴していると考えられます。子ども＝女性の問題という伝統的図式は、決して今日的発

図2は受講生を職業別に区分したのですが、第1位は「主婦」の19.5%、第2位は「公務員」の18.5%、第3位は「学生」の16.8%、第4位は「教員」の15.6%でした。この職業区分がこれまでの一般的な分類を踏襲していますので、チェックしづらかった受講生もいたのではと反省しています。いずれにしても受講生が特定の層にかたよることなく、あらゆる職業層から幅広く参加をいただいたことは、本講座のもつ普遍性が確認されたことでもあり、また本講座の大きな特色ではなかったかと喜んでいる次第です。

すでにテレビ放映は回を重ねていますが、放送を見て登録したいという希望者の問い合わせがまだまだあるほど、反響の大きさに驚くとともに、新構想の教育大学として本学の社会的使命を今後、より一層深め、充実させていく重要性を再認識いたしました。受講生をはじめ、各界各層の方々からの御指導、御鞭撻をお願い申し上げます。

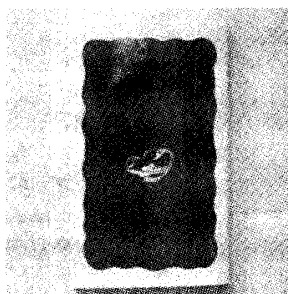
再視聴のお知らせ

下記の日程および会場で実施しますので、番組を見落とししたり、もう一度視聴したい方は御利用ください。

- 実施日 平成4年12月6日(日)
- 実施会場および時刻

会 場	第 5 回～第 8 回放送分
鳴門教育大学	⑤ 13:00～13:45
徳島大学	⑥ 13:50～14:35
香川大学	⑦ 14:40～15:25
愛媛大学	⑧ 15:30～16:15
高知大学	

ブック・コーナー

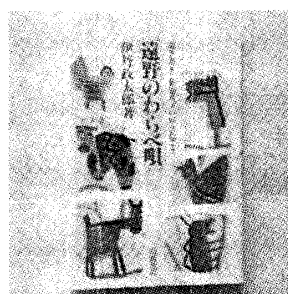


河合隼雄著
子どもと学校
岩波新書

1992年2月刊
550円(本体534円)

「河合隼雄 その多様な世界」(岩波書店、1992年7月刊行)という本が刊行されるほど、専門分野にとどまらず幅広い活躍をしている著者の子ども論であり、教育論である本書は、新書とはいえ濃密な人間讃歌のシンフォニーの世界を現出しています。

子どもの心の世界に長い間、臨床心理学者として携わってきた著者の物事をとらえる基本的視座は、例えば盗みをした場合、その行為を否定しつつ、しかしその行為に内包されている心、つまり盗んで手に入れようとしたものは何かに照射することです。本書は、子どもを愛するとはどういうことをいうのかを考えるために、親と教師へ贈られた最良のプレゼントといえるでしょう。



伊丹政太郎著
遠野のわらべ唄
一聞き書き 菊池カメ
の伝えたこと一
岩波書店

1992年7月刊
1800円(本体1748円)

柳田国男によって集大成された「遠野物語」で有名な岩手県遠野市には、今日でも伝承の文化が生活に根付いています。しかし昔話と異質な世界のもう一つの伝承文化であるわらべ唄—それは、人々に生き方を教えた庶民の暮らしの知恵と豊かな精神の文化がありました。

子守り唄、遊び唄、はやし唄などわらべ唄には様々なジャンルの唄があります。例えば「はやし唄」は、唄としてこれいいなあ、なんてのはまんず無え。なしてがっていって言葉がみんな諷刺だから…。」というように、かつて遠野では子どものしつけや発達に応じてわらべ唄が利用されたのです。わらべ唄のもつ教育的機能に驚くとともに、素朴な唄に託された現実世界の厳しさへ対決する、文化の深さに気付かされます。

声のひろば

テレビ公開講座の受講について

徳島県 辻井 景子

てんやわんやの1日が終わって子どもを寝かしつけると、本当にホッとします。子どもの寝顔を見ていると、「あの時は叱りすぎたな」「まあ、いい子の部類かな」とも思えるのですが、朝から晩まで追いかけて回したりまといつかれたりしていると、時々私の頭の線がブツリと切れてしまいます。職場のママさん仲間と「赤ちゃんにオッパイ飲ませている時、一番幸せを感じるわ」と言い合っていた昔がウソのようです。

「母性愛は男の身勝手な神話だ」という人もいますが、保育所の運動会で1、2歳児が健気に走っているのを見て、他人の子でも涙があふれてくる自分をみると、「我ながら母性愛は豊かな方かな」と思うのですが、毎日子育ての中で感じるこの怒りとイライラはどうしたものでしょうか。自分を離れた広い視野から「子どもの発達と教育」を見られたら、このタコ壺のような閉塞感から抜け出せるかもしれない、と期待しています。

「うずしお」を読んで

徳島県 匿名希望

「1991年の出生率は史上最低の1.53人」、この数字は、調査の対象にはいっているにも関わらず子どものいない私にとっては頭の痛くなる数字です。私だけでなく出産適齢期の女性のほとんどが「子どもは一人か二人でいい。」と言います。たくさん子どもを育てあげることが、女性の一大仕事であった昔と違って、現在は女性も様々な分野で活躍しており、子育てにかかる時間が減っていることも原因の一つだと思いますが、やはり、現代の社会的背景も大きな要因となっていると思います。

子だくさんが女性の誇りであった昔は、地域社会全体が子育てをバックアップしていたようですが、今のように産むことが女性の負担になる社会では、女性が多くの子どもの産むことを躊躇するもの仕方がないかもしれません。「安心して産める社会」への一つのステップとして、この「放送公開講座」を受講したいと思います。そして、男性の方々も父性を見直していただければ…と思います。

テレビ出演講師のプロフィール



鳴門教育大学教授
今津博市 (いまづひろいち)
(第8回出演)

徳島市生まれ。精神科医。専門は内因性精神疾患の病態生理学的研究。簡潔に言うと大人の患者さんの血液の中に異質なものがどうかを研究する学問。現在はこうした面を子どもの臨床と病因との関係から研究している。趣味は切手の収集。古くは大正時代のもを含め、昭和以後の切手はほとんど収集。研究で疲れたとき、行く先々で集めた土鈴の鈍い音を聴くのは楽しい一時。実直な人柄と無心の笑顔は周りの者の心をなごませる。



大阪市立大学教授
倉戸ヨシヤ
(くらとよしや)
(第8回出演)

西宮市で長く生活。カウンセリングが専門。マサチューセッツ大学とサンフランシスコ州立大学で、6年間教鞭をとる。この6月、鳴門教育大学から大阪市立大学へ転出。写真は個展を開くほどの腕前。八甲田、月山、立山でのスキーをはじめ、テニス、マリン・スポーツと幅広くこなす。年に1、2度国際学会で研究発表の他、国際カウンセリング学会のコーディネーターをつとめる。国際派らしい行動力と一方ではナイーブな神経の持ち主。



鳴門教育大学助教授
田中道治
(たなかみちはる)
(第9回出演)

広島県福山市近郊で生まれる。障害児心理学を専門とし、なかでも精神遅滞児の学習過程を研究。現在、アメリカ東部の名門エール大学で研究生活中。保母・保健婦・教師らと障害児保育や教育の実践研究会を毎月、定例で開催する熱心な研究者。学内のテニス同好会に所属。風景画を得意とする油絵は穏やかな性格そのものを映し出す。いつも笑顔を絶やさず、障害児の幸福をめざして全力投球する頼もしい研究者。



鳴門教育大学助教授
安好博光
(やすよしひろみつ)
(第9回出演)

山口県下関市生まれ。専門は肢体不自由児の運動障害を改善するための方策に関する教育・心理学的研究。横須賀市の国立特殊教育総合研究所で10年間、肢体不自由児教育部の室長をつとめた期待の研究者。また、ギターをひきながら作詞、作曲をする音楽人。五木ひろしの演歌が何よりも好き。学内親善対抗ソフトボール大会でみられるねじりハチ巻姿は、出場チーム全員の注目の的。歩きながらのハミングが長髪ときれいなハーモニーを奏でる。



鳴門教育大学教授
田甫桂三
(たんぽけいぞう)
(第10回出演)

東京都大森で生まれる。専門は明治期の教育と社会との関係を計量的に研究する日本教育史。なかでも子どもの実態、教師の歴史、教科の歴史を中心に研究。数年前、ジョージ・タウン大学と米国議会図書館で公教育の成立に関する日米の比較研究を行うなど、たびたび外国へ出張。テレビのスポーツ観戦と海釣りが息抜き。大学では若手研究者や学生の面倒見がよいボスの存在と同時に学内随一の行動派。東京が恋しくなると鳴門のネオン街へくり出す。

編集後記

テレビ講座の放映も中盤に入りました。出演スタッフはいずれも放送界の“新人”ですので、普段ならば大学の講義室でジョークもユーモアも飛び出のですが、勝手が違うスタジオでの収録は、緊張と冷汗の連続です。しかも45分の持ち時間の中で、視聴者へテーマの内容をいかにわかりやすく伝

えるかが最大の課題ですから、一瞬の油断もできません。

幸い、誠意を尽くして講義する姿勢が評価されたのでしょうか、多数の受講生から「わかり易く、勉強になる」といううれしい反響が寄せられています。一方、受講の登録も久し振りに千名の大台に乗ることができました。受講生のみならずの熱意と暖かい支援に深く感謝いたします。

(Y. S.)

テレビ講座通信うずしお

第4号

四国地区
国立大学放送公開講座

—子どもの発達と教育—

1992年
12月3日発行

発行：鳴門教育大学教務課 〒772 鳴門市鳴門町高島 TEL 0886-87-1311 (内線257)

特 別 寄 稿



四国四県が
一つであるために

徳島文理大学
文学部長 岸田元美



テレビ講座の
ご成功を祈る

四国大学長
齊藤 晴男

相当熱心な視聴者の一人ではなかろうかとひそかに自負しているものの、朝の6時の放送開始に遅れずに視聴を始めるには相当の努力が必要になるこのごろです。

しかし、最初にいただいたテキストが、これに類似する他の書物と、質が断然ちがう新鮮な魅力を各所で見いだしたので、これに深く関心を持ち、そのことが最近の映像メディアでどのように工夫され具象化されて展開するだろうか、こころも勉強したい気持ちがあつて視聴を始めました。

というのは、昭和48年から3歳児を第一子にする両親を対象にテレビ教育番組「母と子と」を徳島県教育委員会が開始し、その番組制作委員長を10年間経験したことがあつてのことでした。

当時も情報化、都市化の進展とともに、今までの公民館に集めてする社会教育は困難であつたので、これを改革して、家庭の茶の間に地域に親しみ易い教育番組を送り届ける社会教育へと転換することにしたのでした。

鳴門教育大学のテレビ講座は予想に違わぬ工夫と創意が映像化されています。製作の裏面の労苦を知るものとして敬意を表します。

生涯教育社会の学習内容として、次の世代を背負う子供の発達と教育を理解することは社会人の誰もが一番重要なことだと、私は信じています。日本の未来は子供に託されていますから当然です。

四国四県は一つの合言葉が、八十八ヶ寺巡礼の旅、高速道路網の整備にこの講座が加わって、土曜日のこの時刻にどなたと共に視聴しているか、想像するだけでも楽しみを覚えます。

私が小学校に通っていた昭和一桁の年代には、私の家は6人家族でした。つまり祖父母、父母と私たち兄弟2人が構成員だったということです。当時を思い出してみると、「キング」という大人の雑誌があつて父が購読していました。それを私が読んでばかりいるので叱られた記憶があります。そんなときにも祖父と父が「晴男を叱ろうと思うが」といって事前に相談をしていたのを、盗み聞きでもしたのでしょうか知っていました。あるいは、私に反省させようとしてわざと聞こえるように話していたのかも知れません。とにかく、その頃は子供の教育は両親が祖父母と相談をしながらやっていたのだと思います。

ところが、私の子供の場合には夫婦と子供だけで暮らしていましたので、上に述べたようなことでは親に相談することはなかったと思います。この意味では子供の教育については経験を蓄積する手段がなくなりました。核家族として生活する親にとって子供の教育は未経験の状態から始まり、しかも、失敗したからと言ってやり直しのできるものではありません。その意味でも今回の鳴門教育大学の企画は、誠に時宜に適したものであると考えています。四国地区に於けるテレビ講座は、これで大体四国の国立大学を高知大学から始まって地図を時計回りに一巡したと思います。

衛星放送による放送講座も開設準備が進んでいると聞いていますが、全国一律の講座とは別に地域に密着したこのようなテレビ講座も順調な発展の道を歩まれることを心から願っています。

小講義特集

第1時限講義「子どもの目と心」

教授 一宮 俊一

最近、小学校や幼稚園・保育所の教師からよく耳にするのは、「子どもたちといっしょにいて、目と目の合わない子が増えてきているように思う」というのです。これには、著しく内気で逃避的であったり、関心や気力や理解に乏しかったり、あるいは、自閉児のように、ある特定の物にのみ強い関心を示して人に目が向かない場合など、さまざまです。

いずれの場合も、子どもの心や気持ちが活発に動いていない点に共通性があります。古来、「目は心の鏡」といわれるのは、例えば、やさしいまなざしは、心の安定した状態を示し、きらりとした眼光は、何かに強く感動した意欲的な気持ちを反映しているからです。

私たちは、家庭や学校や地域での仲間集団を通して子どもの感動体験を広め深め、情緒を安定し、暖かい心を通い合わせて、子どもの目が輝くような教育を進めたいものです。

第2時限講義「授業における教師の役割」

助教授 吉崎 静夫

教師は、授業において、設計者、実施者、評価者という3つの異なる役割を同時にもっています。そこで、これらの役割を、演劇や映画に例えてみるならば、脚本家、監督（演出家）、俳優（主役と脇役）、そして評論家といった役割に相当します。まさに自作自演といったところです。これらのことから、教師という職業がもっている多様性と困難さを想像することができます。しかし同時に、教師という職業がもっている専門性や主体性といった魅力を感じとることができます。

受講生の皆様も、授業参観日などで教室を訪れたときに、自分のお子様やお孫さんの様子を見るだけでなく、「私がこの教師であったら、次にどのような教え方をするだろうか」といった教師の立場にたって、授業を観察してみてください。きっと、ひと味違った教室風景が皆様の前に現れてくることでしょう。

第3時限講義「国際化の一視点

—日本のなかの外国人—

教授 橋本 暢夫

日本における国際化の問題を考えていくとき、たえず、経済や政治面での摩擦がつきまとっていることに気づかされます。そうした摩擦や紛争が起こらないようにするためには、異文化を理解することにとどまらず、自国（自国民）が世界からどのように見られているかを確かめる（省察する）ことが必要となります。

日本（及び日本人）が外国からどのように見られているかといった学習（自己学習）は、折あるごとに行われていかなければならないといえます。Tea Time に掲げました『ニッポン四百年』のほかに、『外国人による日本論の名著』（佐伯彰一他編 中公新書）には、ゴンチャロフ（日本渡航記）、オールコック（大君の都）から、パンゲ（自死の日本史）まで、42編が紹介されていて、読み手に内省を迫るとともに、国際化について考えていく時の一つの視点を与えてくれます。

第4時限講義「現代大人かしこさ考」

教授 佐々木 保行

いまでは国際化、国際交流という言葉が違和感なく日常の世界に入りましたが、国際化とは異文化を理解し、受容するオープン・マインドのメンタリティを内包するものです。換言すれば異質なものに対する許容・理解・想像の心的態度といえます。これは今日の社会で日本人の「かしこさ」が問われていることでもあります。ところでかしこさとは何でしょうか。いま風の認知科学で言うならば、「情報の処理能力の確かさ」とでも呼べるのでしょうか。でも本当のかしこさとは精神のしなやかさであり、知性に裏打ちされた柔軟で奥深い生きる力に他なりません。

「かしこい」人が多いといわれる大学の教授会でも、相手の心を理解することも想像することもできず、一方的に攻めまくることだけにエネルギーを使う人がときどき見られます。ロマンも想像力も欠乏した人間に与える最大の致命傷は、ロマンも想像力も豊かな人間がケンカに負けることです。

声のひろば

四国地区国立大学放送公開講座を視聴して

香川県 主婦

「放送公開講座」のことを知ったのは、新聞の小欄（西から東から）によるものでした。最近、孫の成長発達過程をみるにつけ、私が子育てをした頃とは、社会も生活文化も変化しており、見直すにはいい機会だと思い、早速、申し込みをした次第です。

テレビ講座登録証が送られてきた時は、学生時代に返ったような若やいだうれしい気分でした。

早、3回終わりましたが、テキストに目を通して読んでいたのですが、テレビで見るカラーの図式説明は、説得力があり、少々、古ぼけた頭脳に鮮明に焼きつきました。テレビ視聴によるカラー絵図の説明は、理解するにとっても楽です。又、現地訪問の録画は、テレビならではの企画で、とてもありがたいことです。45分に盛りだくさんの内容で、画面の変化についていけないこともあります。欲ばらないで、後でゆっくりテキストやVTRをみて納得しています。

私一人で勉強するには勿体なくて、若いお母さん方は勿論、友だちにも受講するようすすめているこの頃です。

未来にはばたく子ども達の幸を願いつつ、最後まで楽しく受講できるようがんばりたいと思っています。

テレビを見て

徳島県 公務員

「高所平気症」初めて耳にしたこの言葉が、実は高層ビルからの子供の転落事故の原因の一つだということを知り、驚きました。木登りの機会を持たない子供達は、「高所恐怖症」という野生的能力を失っている、ということでした。自分が子供の頃、何気なくしていた木登りは、知らぬ間に野生的能力を養っていたのです。そして今の子供達にとって木登りは、遠い存在なのでしょう。

子供達は、ファミコン、漫画等、家の中で遊べる物を沢山持っているようです。また、塾通いもあるのかもしれませんが。私の場合はそんな物ありませんから、外で遊ぶしかなかったのです。木登りをしたり、小川で遊んだり。小川を飛び損ねて、ずぶぬれで帰ったこともありましたが、楽しい思い出です。子供だったからこそ、できたことだと思います。

今は、このような機会が少ないので、きっかけを作

ってあげることが、昔、子供だった大人の役目なのでしょう。

受講の動機……？

徳島県 匿名希望

親になって14年。欠点だらけの親ながら、今までのは、まあまあ“情緒的なかわり”やスキンシップを積み重ねてきたと思っているのですが、中学生ともなると、コミュニケーションの難しさを痛感しています。子どもの気持ちや自主性を尊重せねば…と思いつつ、結果を予測した親の意見を押しつけがちになります。自分で決定させ、失敗しても『それもいい経験だ』と見守ってあげる余裕がなかなか持てないのです。そんな風ですから、子どもにも依存的な甘えが思考の根底にあるのです。1回目の講義にあったように、私の養育行動は子どもの依存心を育てるばかりで、アメリカの母親のように自己主張や自立心を育てる面が欠けていたなあと反省させられました。これからの講義を通して、私自身が“ほど良い母親”に、私自身が依存的でない自立した人間になれたら……と思っています。

講座通信について

徳島県 匿名希望

毎月送られてくるテレビ講座通信うずしおは、いつも楽しく読んでいます。

一番おもしろいのは、テレビ出演講師のプロフィールです。テレビを見るときは、いつも、テレビ講座通信のプロフィールを持っています。テレビに写し出されている真剣で緊張した顔と、プロフィールの碎けた顔のコントラストが、なんともいえない親しみを感じさせてくれます。

また、ブックコーナーは、子どもを育てる上での悩み、不安、疑問などのカウンセラーの紹介という感じで読んでいます。

最後に今年のテレビ講座「子どもの発達と教育」は、とても親しみのあるテーマです。

子どもを育てるということは、人の一生における最大のテーマ、問題であると思っています。この講座を受講することによって、子どもの教育に自信を持てた

再視聴のお知らせ

下記の日程および会場で実施しますので、番組を見落とししたり、もう一度視聴したい方は御利用ください。

- 実施日 平成5年1月24日（日）
- 実施会場および時刻

実施会場	第9回～第13回放送分
鳴門教育大学	⑨ 13:00～13:45
徳島大学	⑩ 13:50～14:35
香川大学	⑪ 14:40～15:25
愛媛大学	⑫ 15:30～16:15
高知大学	⑬ 16:20～17:05

テレビ出演講師のプロフィール



広島大学教授
原田 彰
(はらだあきら)
(第11回出演)

朝鮮・慶州の生まれ。その後、山口県下松市で生活。専門は教育社会学、なかでもデュルケームの教育理論の研究。現在の中心的研究課題は人権教育の諸問題。この5月に鳴門教育大学学校教育研究センターから母校の広島大学教育学部へ転出。徳島県在住中は県社会教育委員など各種審議会委員として活躍。ノーブルな顔とすきを感じさせない知的な雰囲気は、対人魅力としていつも相手を圧倒する。他方、いまだ乱れたことがないほどこよなく酒を愛する酒豪。今後の研究に酒道の社会学的考察が期待される。



鳴門教育大学教授
一宮俊一
(いちみやしゅんいち)
(第12回出演)

徳島市生まれ。専門は障害児教育の内容に関する歴史的、制度的な研究。研究成果を随時著書として刊行する学究派。他方、テニス、登山などのスポーツも好む。これまで富士山に3回、石鎚山、剣山などにも度々、登山。最近では今年の5月の連休を利用し、鳴門最高峰の大麻山（標高530m）をついに征服。広島カープのファン。学部主事（部長）や附属養護学校長等の要職を歴任。端正な身のこなしはダンディな紳士を彷彿させる教育学研究者。



鳴門教育大学助教授
伴 恒信
(ばんつねのぶ)
(第11回出演)

福岡県生まれの東京育ち。教育社会学を専攻。現在はエリクソンの発達論をベースに人間発達の社会学的研究と生涯教育・生涯学習の国際的動向を中心に、国内の生涯学習県別マップ作りの調査研究。ハンブルクにあるユネスコの教育研究所に1年半研究者として勤務。得意の語学を武器にカミングスなど世界的に著名な学者との交流も多い国際学派。学生時代はワングル部の一員として全国の山を歩く。穏やかな語りの中に、ときとして相手を震撼させる言葉が飛び出す。全国各地から講演依頼が舞い込む若手のホープ。



鳴門教育大学教授
橋本暢夫
(はしもとのぶお)
(第13回出演)

大阪市旭区の生まれ。専門は国語教育の歴史および国語教育に関する理論と実践についての研究。心理学者の波多野完治氏が「世界の母国語教育のとび抜けた存在」と絶賛した大村はま氏に学生時代から接触する。以来、大村氏を研究対象に今日に至る。中国の名門・南開大学（周恩来の母校）で1年間、日本語教育を教授。スポーツは野球、サッカー、陸上などを体験。昭和28年、準硬式野球の広島県選出国体選手として出場。論理整然とした話し方は流石に国語教育の研究者。



鳴門教育大学教授
浅口 俊
(たきぐちすぐる)
(第12回出演)

徳島県三好郡の生まれ。大学では教育学を専攻したが、現在は社会科教育学を専門とする。具体的には子どもが授業の中で社会を認識していくプロセスを明らかにする研究。本学の評議員や附属小学校校長併任の経験をもつ。いまなお実践と理論の統合をめざした学問の構築に情熱を注ぐ斯界の権威。子どもを愛し、学生を愛し、酒をたしなむ見識高い研究者。のれんや赤ちやうちんに人生の風情をかみしめるのが、心やすらぐ一時。陰日向なく接する生き方に、まろやかな性格そのものが滲み出る。



鳴門教育大学教授
浅野弘嗣
(あさのこうじ)
(第13回出演)

大阪府高石市の生まれ。専門はマリア・モンテッソリーの考えた幼児期の教育方法についての研究。中国との交流が深く、すでに北京・南京はじめ主要都市を6回にわたって訪問した体験をもつ中国教育通。鳴門へきてから魚釣りの面白さにひかれる。これまでに釣りあげた最大の獲物は30cm級のチヌ。一方、いまだに750ccクラスの自動二輪車で疾走する若さも健在。何故かパニー・ガールに心魅かれる温厚な幼児教育学研究者。

編集後記

本号には鳴門教育大学にゆかりの深いお二人の先生（元・前副学長）から、御多忙にもかかわらず特別寄稿のエッセイを頂戴することができました。厚く御礼申し上げます。

テレビ講座の放映もいよいよ残り少なくなりました。「うずしお」第2号の巻頭論文の中で、「一回一回の放送から、

お役に立つことが見い出され、あるいは、新しい発見がなされればと、願っております」という野地学長の心境は、まさに講師側と放送局側との意図を適切に表現した言葉です。どうか最後まで視聴いただき、「新しい発見」が積み重ねられることを切望いたします。

(Y. S.)

テレビ講座通信うずしお

第5号

四国地区
国立大学放送公開講座

—子どもの発達と教育—

1993年
1月14日発行

発行：鳴門教育大学教務課 〒772 鳴門市鳴門町高島 TEL 0886-87-1311 (内線257)

最終小講義特集 1

「親ってなんだろう」

教授 佐々木保行

子どもや若者の少ない社会を「少子社会」と造語した経済企画庁の『平成4年度版：国民生活白書』は、近い将来の少子社会の到来に警鐘を鳴らしました。それは直接的には平成3年の出生率が史上最低となったことに端を発しているのですが、この他に家庭や家族をめぐる価値観の乱立も、大きな要因として指摘することができます。

このような過渡期のいま、親子の関係を洗い直すとどうなるのでしょうか。1982年にフランスで出版され、いまや古典的となったラパイユの『親ってなんだろう』（日本エディタースクール出版部、1988年）は、親であることに懸命な親の自立を助けるため、子どもや若者が親という他者を受け入れ、援助する必要性を説いたユニークな本です。親の役割は二次的で、自分のことや自己の個人的発達に関心を集中させることのできる親こそ理想の親である、とラパイユは述べています。

親が若者へ率直に助言を求め、手助けを求めれば、彼らはきっと答えてくれるはずです。私たち親は、親の心配、苦悩があたかも親の特権であるかのように振る舞い、演じることをもうやめてみたらどうでしょうか。親自身の自立のためにも、子どもや若者の自立のためにも。

「天使のような児たち」

教授 今津 博市

私が初めて「自閉性障害児」に遭遇したのが昭和37年でしたので、ちょうど30年が経過したことになります。今では誰でも知っている「自閉症」という呼び名だけれども、カナー先生が世界で初めてケースリポートしたのが昭和18年でしたし、わが国でも当時の驚見（現在の中沢）たえ子先生が名大医精神科に在籍していた頃に発表した

のが昭和27年でした。だから、私が初めて経験した当時では、日本でも8編しか文献がなく、世界でも180余編の文献しかありませんでした。当然カナー先生の題を直訳して「早期幼年性（幼児）自閉症」と呼びました。当時、約6ヵ月入院してもらって「行動特性」などを観察し勉強したことを思い出します。その児は「ちゃん!!」と呼んでも振り向いてもくれないし、ことばもコミュニケーションしてくれるものは何もありませんでした。今は33歳となっています。

その後、現在まで診た当該児は数百例になっていますが天使のような児達は忘れることができません。ときどき、若かった当時共に走り回った様子の天使たちの夢を見ます。

「『学校五日制』と子ども」

教授 澤口 俊

「学校五日制」が九月から毎月第二土曜日を休みにする形でスタート、多忙な子どもたちに、ほんの少し自由な時間が与えられました。明治初年からの学校教育史上の大きな変革だといわれます。ところが、「学力が低下する」「時間をもてあます」「非行がふえる」などの不安や批判が相次ぎ、受け皿づくりが問題になりました。文部省の協力呼びかけに応え、各地で「サタデーサービス」が実施されるという始末でした。

これらはすべて、おとなの意見や対応。当事者である子どもの意見は、五日制のスタートにどう反映されたのでしょうか。「うちの校長先生なんか『土曜日の午前中あげます』だって。本来なら『返します』じゃね。わたしたちの時間なんだから」という子どもの声に耳を傾けてみてはどうでしょうか。子どもや教育を見直すきっかけになります。

最終小講義特集 2

「知識とは何か」

教授 田甫 桂三

最近子どもの実態について、調べています。100年前の子どもは、現在の子どもにくらべて、とても知的能力が低いように思います。公開講座の放送でも話しましたが、小学校入学時の知っている言葉の数や計算力は、現在の子どもに比べてはるかに劣っています。人間は多くの物事を知り、科学・文化を発展させ幸せに成ってきました。それゆえ多くの事を知っている現代の子どもは、昔の子どもより幸せであるとも考えられます。

しかし本当に幸せかどうかを考えますと、どうも疑問で仕方ありません。その理由を考えてみますと、人間の幸せにつながる知識は現在の子ども達がそうであるように他人から強制的につめ込まれた知識ではなく、自ら自発的に獲得した知識のように思います。これこそが本当の知識であるとしたら、公開講座を受講されている皆様のような人こそ望ましいといえます。私自身が、やっている大学での研究はどちらであるのかなと考えながらこんな思いをしています。

「保育室の外へ出よう！」

教授 浅野 弘嗣

中国では、各地の保育を見せていただくと、その後必ずといっていいほど園長先生が、「どうぞなんでも感じたことをありのままお話になって下さい。私たちはよりよい明日を目指したいのです。」とお尋ねになります。待ってましたとばかり、私は一貫して次のようにお伝えしています。

「主としておとなの考えで準備したものを使うことから、子どもたちが必要にせまれて、『こんなものがほしい!』との発言が飛び出すのを忍耐して待ち、子どもとともに、お金をかけずに、努力してそのものを手に入れることが大切です。たとえば保育室から出て、自然界が贈物として用意してくれているものに気づかせ、それを自分たちの活動に生かすのです。木の葉や実などは、“制作”の素材にも“ゲーム”にも使えます。外に出ることで最も大きな収穫は、人間は自然界の一存在で、生かされて生きていることを感じさせてあげられる点だと思います。」と。

「ライフと実質価値」

助教授 伴 恒信

英語のライフ (LIFE) という言葉には、生活、人生、生命の3つの意味が含まれています。このライフと他の言葉が結びついた連字符領域が、最近の新たなブームを作りあげてもあります。例えば、ライフサイエンス (生命科学) は、遺伝子操作技術の発展と相俟って科学の最先端領域を構成し、生涯 (ライフロング) 学習は、この公開講座をはじめとして広範な人々に意義を認識され実践されるようになりました。

こうした動きも、高度経済成長、大量生産・消費の経済優先の時代風潮の中で長らく片隅に追いやられていたライフそのものの実質的価値を見直そうとする気運と軌を一にしているようです。しかし、お金の価格やテストの点数・偏差値等の交換価値に大きく規定されたこれまでの人々の意識までもは、なかなか容易に変わることはないでしょう。

「子どもの目」

助教授 佐古 秀一

第6回の講義 (テレビ放映) では、学生に未知の学級で授業を行わせることを試みました (おぼえておられますか?)。そのなかに、児童が学生の授業について感想を述べる場面があります。実は、収録前の打ち合わせの段階で、放送局のスタッフから、「小学校3年生の子どもに、授業の感想を求めることは無理ではないでしょうか?」という懸念が出されていました。私も、「一度、やってみましょうよ」と言ったものの、まったく自信などありませんでした。

しかしながら、われわれの心配は、マイクの前で彼らが次々としゃべってくれた言葉によって吹き飛んでしまいました。彼らは、実にいきいきと、担任の先生の授業と学生の授業の違いを語ってくれたからです。放送局のスタッフもこれには驚いていました (私も本当にホッとしました)。子どもが教師の行いをいかに真剣にかつ鋭く見ているか、あらためて思い知らされた経験でした。

番組制作に携わって

四国放送ディレクター
岸 佳一

四国放送が四国地区国立大学放送公開講座の制作を担当させていただくのは、徳島大学医学部に次いで2回目です。

鳴門教育大学の企画による放送公開講座に関わるようになって一年半が過ぎました。この間、シリーズ各回についての打ち合わせと取材を重ねてきました。大学へお邪魔したのが51回、取材24回(このうち県外取材が8回)取材テープの編集を経て、スタジオ録画へやっとたどりつくわけです。

番組のタイトルは四国地区となっています。これは四国の四局で放送されるということです。スタジオ録画が終了しますと、出来上がったテープを三本コピーし中身をチェックし、三県に発送してこれで一回分が終了します。番組の性格上どうしても受講生のみなさん中心になりますが、テレビの性質上一般視聴者も少なからず目にするという前提がありますので、できるだけわかり易く且つ興味をひく番組作りが要求されます。その意味ではいかがなものだったでしょうか。

脚本担当
橋本潤一郎

大学放送公開講座の番組構成に関わって一年余り、「教育」という抽象観の世界から現実の子どもの生活までの、幅広い出口のない深みに捉えられた日々でした。

1933年生まれの私は、小学入学が紀元二千六百年に当たる昭和15年で、そこで受けた教育は「富国強兵」戦争遂行への道でありました。学んだ歴史は皇国史観、戦後中学に入学して一変した歴史観にとまどいながらも、軍国少年の呪縛から放たれ、青空に舞うような解放感に浸ったものでした。現在の教育を考える時私は、軍国主義から民主主義へと移り変わった少年時代の教育を想起してしまいます。

いま教育の荒廃が叫ばれ「教育」は曲り角に来

ています。折しも文部省は中学の指導方針を転換して、業者主導の偏差値を追放するといっています。教育って何だろう。「子どもの発達と教育」をテーマとしたこの講座は、その命題を解き、曲がり角の教育を考える、又とない機会ではないか、そんなことを思っています。

四国放送アナウンサー室
坂上 昭子

入社4年めの私が、大学講座のアシスタント役を仰せつかったのは、昨年の春でした。テーマは「子どもの発達と教育」と聞いて、まだ独身の私ですがまたとない勉強の機会を与えてもらったと、とても嬉しく思いました。自分の幼少時代のことを思い起こして両親に感謝したり、変化する家族形態の中で、子供にどんな風に接していけばいいのかなどいろいろ考えさせられました。子供は社会の鏡といわれるだけに、大人の責任を感じました。

また、テレビの画面に、近寄り難い雰囲気で登場する先生方も、スタジオで収録なさる時は、いつも極度に緊張なさっている様子で喋る内容を赤や黒のペンでメモ書きされたり空に向かってぶつぶつと練習されたり、氷水を何度もお飲みになったりと、隣りでウォッチングさせていただくと、非常に人間的な面を垣間みることができ、親近感がわきました。

いろいろな方に助けられ、ここまでこられました。本当にお世話になりました。



(左から岸さん、坂上さん、橋本さん)

鳴門教育大学教務部長
阿部 清



平成4年度四国地区放送公開講座テレビ科目を、鳴門教育大学が担当しましたが、なにしろ初めてのことで、最初は何をどうしたらよいか戸惑い全く雲をつかむような状態でした。しかし、先発大学、放送局、あるいは講師の方々の

親切なご指導ご協力のもと、「始めることができれば半ば成功だ」と励まされ、それこそ無我夢中で何とか軌道にのせられ、やればできることを認識しました。特に心配した受講者も1,221人の方にお申し込みを戴き、本当に感謝しております。

ところで、事務担当としては、でき映えに期待するとともに、受講者の方々と同じような子どものいる者は、現在自分の置かれている立場から家庭・地域・学校を考え、またすでに子育てを終わっている者は反省をこめて、毎朝視聴しては意見を交わしました。そのなかである一つの考えとして、子どもの教育とは、子どもの成長発達段階に合わせ、また発達を促すため、いろいろなことを継続して経験させ、特にホメルことに留意し、「子どもにやる気を起こさせること」ではないだろうかという意見がありました。

さて、このテレビ放送を契機として、皆様ご自身どうお考えになりましたでしょうか。

受講生からの質問

Q 「愛情遮断性小人症あるいは情緒剥奪侏儒症とよばれる疾病」について、その症状と予後について教えてください。 徳島県 匿名希望

A 子どもの身体発育には遺伝や栄養などの因子が影響を与えますが、心理的要因の関与も見逃すことができません。保護者、とりわけ母親と子どもとの精神的関係が慢性的に満足すべき状態でない場合、情緒的障害だけでなく、身体的な症状を示す子どもがあります。乳幼児期にみられる愛情遮断性小人症は、その典型といえます。

患児の身体発育は遅延し、低身長、低体重となります。運動機能や知能にも遅れがみられること

があります。食欲は亢進しますが、栄養失調を示します。表情は乏しく、人を恐がったり、疑うような目で見ます。人に無関心であったり、反抗的な場合もあります。身体的な虐待を加えられている患児では、皮膚に出血や打撲傷などの外傷が発見できます。

両親と離して入院させたり、親戚に預かってもらうなど、環境を変えることによって、身長・体重の増加は促進され、その他の症状にも改善がみられるようになります。もちろん治療の基本は家庭環境と親子関係の矯正にあります。その成否によって、患児の予後は影響されると思われます。

井上和臣（助教授、精神医学）

声 の ひ ろ ば

楽しいテレビ講座

徳島県 匿名希望

毎週土曜日は眠い目をこすりつつ、休日の早起きを頑張っています。というのも、ビデオ予約が下手でよく失敗するためです。これまでよくあった教育講座とは違って代わり、毎回、先生方のサービス精神に感心しています。とくに、第4回のY先生の縄跳びはヒットでした。「うしろ二重跳びなんてできるかなあ、お年のようなけど（失礼!）」と思わず息を詰めて見てしまいました。みごとなパフォーマンスの後、呼吸の乱れも感じさせずただちに講義をお続けになったのはさすが!

子供と共に親も発達

徳島県 養祖京子

河合隼雄氏が「物が溢れる現代、親は物を安易

に与え、頭を使わなくなった。」という講演を聞いたことがあります。子供の発達と教育に関心をもつ母親としては、どういうふうに使ってよいのか、指針となる「知恵」を得たいものだと思っていました。しかし、生身の人間を扱う場合、その日の気分やたまたま得た知識によって対応が異なり、愚かな親は、情報に流されて右往左往しているのが現状です。この講座は、そういった悩める母親に、様々な角度から子供の発達を念頭に置いた教育をみなおすキッカケを与えてくれました。学校という場をしばらく離れていた母親が公開講座を通じて、テレビや本で自ら学ぶことは、子供だけを勉強や運動に駆り立てるのではなく、母親が自らの生き方を問い、子供と共に育っていくことができるような気がします。

編集後記

テレビ講座通信も本号をもって終了となりました。短い期間でしたが、受講生のみなさんとの双方向性コミュニケーションの実験的試みが具体化されたことは、関係者の一人としてこの上ない喜びです。しかも大学での研究、講義、会議等のなかでの編集作業は、それほど苦痛ではありませんでした。むしろ楽しみながら楽しいアイデアを着色していく過程は、ミニ・コミ紙の編集長兼社長にもなった気分が愉快的な体験でした。ひょっとすると自分は大学教授よりも、マス・コミ界の方がふさわしかったのでは、という幻想にも何度か襲われました。しかしトラバユしたところで現

実は甘くありません。いまは幻想の楽しさの世界に浸った幸せを、なつかしく想い出しています。

さいごに、テレビ講座通信の発信局である鳴門教育大学は新しい構想で設立された大学で、夢も希望もたくさんあります。旧制の総合大学のようないかめしさも伝統ありませんが、教育の専門総合大学として21世紀をにらんで着実に歩んでいます。これからも市民と共生できる大学でありたいと思っています。受講生のみなさん!開かれた大学へお気軽においでください。

これまでの御愛読を深く感謝申し上げます。

(Yasuyuki Sasaki)